

小さなホセとロバの旅

G・フォイステル作 関 楠 生訳



岩波書店

943 フォイステル, ギュンター

小さなホセとロバの旅

ギュンター・フォイステル作 関 楠 生訳

岩波書店 1969

174 p 23 cm (岩波おはなしの本) 小学2~4年

(参考) Feustel, Günther: José—Eine Geschichte
aus Südamerika, 1963.

岩波おはなしの本

■ 小さなホセとロバの旅 定価五〇〇円

一九六九年七月十日 第一刷発行 ©

訳 者 関 楠 生

発行者 東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

岩波雄二郎

印刷者 長野市中御所二ノ三〇 田中忠

発行所 東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

株式会社岩波書店

本文印刷 大日本法令印刷株式会社

製本 株式会社松岳社

表紙・箱・見返印刷 錦印刷株式会社

小さなホセとロバの旅

G・フォイステル作

関 楠 生 訳

岩 波 書 店



JOSÉ
Eine Geschichte aus Südamerika
By Günther Feustel
Illustrated by Hans Baltzer
1963

Original German edition published by Altberliner
Verlag Lucie Groszer, Berlin.

This book is published in Japan by arrangement
with the original publisher.

も
く
じ



大きな道を歩くホセ	9
ホセと片耳ロバ	15
ホセと大きな町	25
ホセとはらべこ	44
ホセが片耳ロバを売る	58
ホセとペドロ	73
ホセとサンダル	84
ホセとあくまのおどり	94
ホセとサンダル製造団	107



ホセがサンダルを ^う 売る	124
ホセと小さなおじょうさん	138
ホセと大きな ^{いえ} 白い家	146
ホセがペドロをみつける	163
^{やくしや} 訳者のことば	173

小さなホセとロバの旅

G・フォイステル作
関 楠 生 訳



大きな道を歩くホセ

ホセが、大きな道を歩いてきます。

長くてはてしない道は、アンデスの山々にそって走り、とつぜん、ぐっと谷へ落ちこんでいきます。

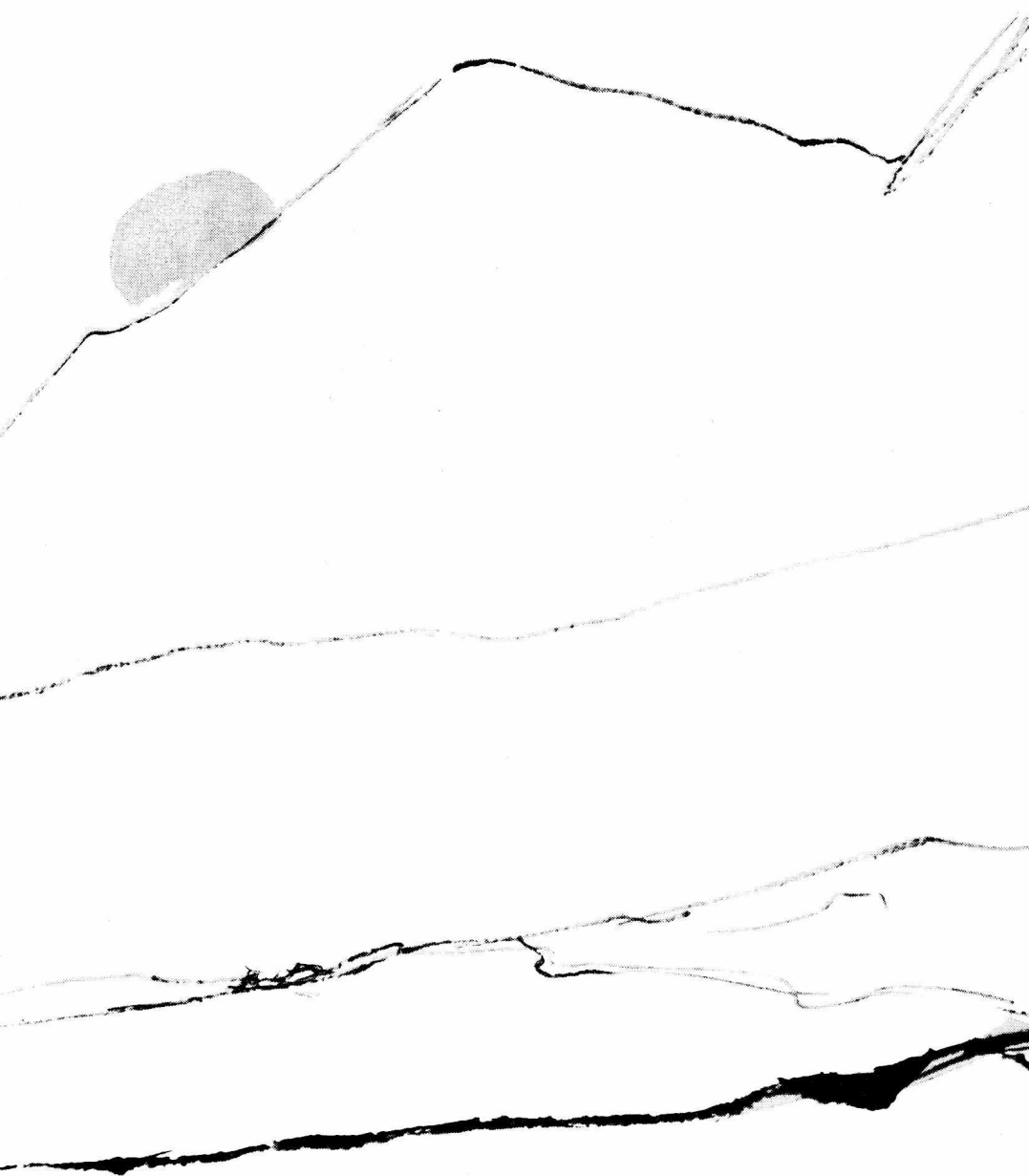
石とじやりでできた道、この道はポトシへいく道です。

大むかしからある、古い、古い道なのです。

むかし、はてしのない大むかしから、ケチュア族のインディオは、はだしでこの道を歩いて、錫の鉱山のふもとにある大きな町へおりていくのでした。塩やジャガイモやトウモロコシを、市場へはこんでいくのです。南アメリカの山地の畑は、小さくて、石だらけで、やせていますが、インディオは、じぶんたちのもちものではないこういう畑よ

大きな道を歩くホセ







りも、もつとびんぼうでした。

この大きな、はてしのない、石だらけの道^{みち}を、いま、小さなホセが歩^{ある}いています。ホセはたったひとりであ^{ある}る歩^{ある}いているのです。

ホセはたちどまって、うしろの空^{そら}に高^{たか}くそびえたつアンデスの山々^{やまやま}をふりかえりました。あのあたりのどこかに、プーナの村^{むら}の小屋^{こや}があるはず^{はず}です。そして、村^{むら}はずれの一軒^{けん}の小屋^{こや}に、ホセのおかあさんがすんでいました。小屋^{こや}にはまどがなく、ね

ん土造り^{どづく}で、屋根^{やね}には草^{くさ}がかぶせてあります。戸^とだつてありはしません。四角^{かく}のあながあいているだけなんです。

小さなホセは、その小屋^{こや}で生まれたのです。

でも、いまはプーナの小屋^{こや}はみえません。

大きな道^{みち}を、もうずいぶん長い^{なが}こと歩いてきたのですから。

ホセは、足のうらをあたためようとして、

日のあたっている岩^{いわ}にじつとおしあてました。

山のなかには、おそろしく寒い^{さむ}のです。

ホセは、ひとりぼっちです。



大きな道を歩くホセ

広い世間^{せけん}にでて、パンのある場所^{ばしょ}をさがすつもりでした。プーナ村^{むら}の暗い小屋^{こや}には、もう、おかあさんと三人^{にん}のいもうとがたべるだけのパンもなくなりそうだったのです。

ポトシにいけばパンがある、ホセはそうかんがえました。

そして、大きな道^{みち}を歩きつづけ、ポトシの町^{まち}へおりていきました。

ホセと片耳ロバ

道の右にも左にも、たくさん石が、ころがっています。そして、そのあいだに、たけの高いサボテンや、とげのあるかん木がはえていました。

ホセは、歩きながら、じつとかんがえこみました。

おかあさんのことや、プーナ村の暗い小屋のことをかんがえているのです。おなかのへっていることも思いました。それから、石でつくった大きな家を空想しました。まどはガラスで、ちゃんとした戸のついている家です。その家のまえには、ラマが五とうたっていて、いいにおいのするトウモロコシのパンを山のようにつんだ大きなかごを、せなかにしよっているのです。

ああ、トウモロコシのパンはおいしいな、とホセはかんがえました。